

随想

佐伯城が海にのぞむ理由

それは高慶の中にある「海賊」の血!?

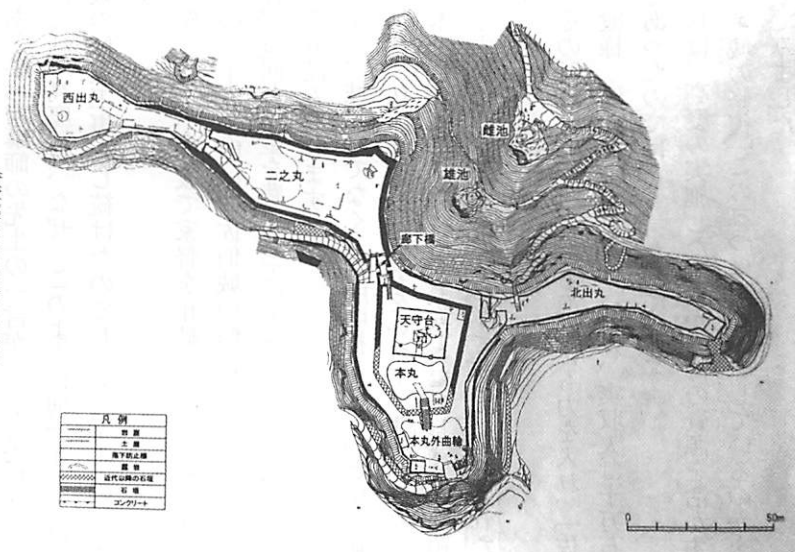
戸山 恵子

(会員 佐伯市匠南)

一月二十四日、佐伯文化会館で「海にのぞむ山城、佐伯城」の価値は天守に「あらず」というタイトルでシンポジウムが行われました。

基調講演での宮武正登氏による「佐伯城の構造と築城技術」では、全国の城をわかりやすい言葉でお話しされ、年代の見分け方、特に石垣の見方は、目からウロコのであるような感じを受けました。これ一つとつても来てよかったです。用意して頂いた資料、佐伯城の測量図が、江戸時代初期から現在に至るまで、七枚も添付されていて、とても興味深く見る事が出来ました。

改めて気付いたこともありました。



佐伯城跡山頂測量図

かつて、私は、佐伯城を鶴屋城とよんでいました。

また、「城山」という言い方には、市民の皆さんが親しみをこめて言っているように思われました。

なぜ「鶴屋城」かという点、山の形が鶴が舞う姿に似ていて、当時の城下町が「塩屋」と言ったから、それを合わせて「鶴屋城」と呼ぶんだと、誰とはなしに教えられた気がします。

けれども、実家のある旧市内からも、今、住んでいる上堅田からも「鶴」の姿には見えないのです。この事を大変不思議に思っていました。

私の子どもたちは、池船側から大橋を渡った所から見る城山の姿が、「ガメラ」に似ていると言っていたほどです。

でも今回用意していただいた山頂の絵図七枚から、石垣が鶴が大空を飛んでいる姿そのものだということが良く理解できました。

山の型ではなく、城の石垣の型だったんですね。しかも上から見た姿。何十年もかかってやっと納得することができました。

養子先は海の見える城下町

あと一つ、講師の先生の一言がとても気になりました。「彼(高慶)は、なぜ このように何十年もかけて、城の修復工事をし続けたのでしょうかねー」の言葉です。

確かに二十五歳で家督を相続してから亡くなるまでの四十三年間は、佐伯城の修復に執念とも思える程、時間とお金を費やしていたことは、「温故知新録」からも読み取れます。

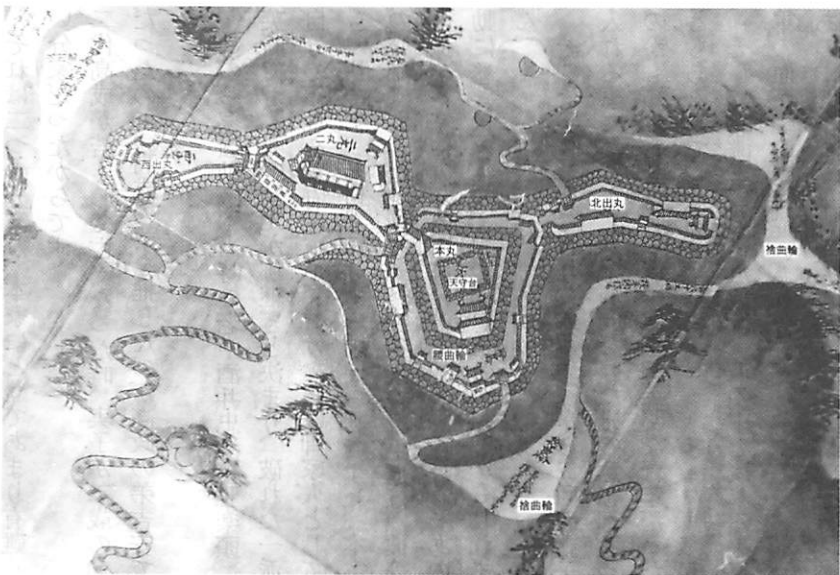
また、城だけでなく、五所明神をはじめとする領内の神社・仏閣の改修にも力をいれています。これらの土木工事には莫大な費用がかかったでしょうが、領民からすれば、いわゆる公共事業ですので歓迎されたはず……。

その財政源の一つである漁業にも力を入れ、「佐伯の殿様 浦で持つ」とまで言われ、実収入は十萬石近くあったのではとも言われています。

私は、高慶の実施した「豊かな海の資源を活かす」と「城の修復」この二つは何を意味しているのかを考えてみました。



元文三年（1738）御城并に御城下絵図



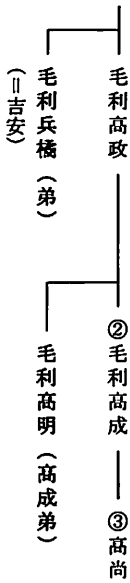
元文三年（1738）御城絵図

陸に上がった来島水軍の末裔

以前、佐伯史談二一九号にも書いたのですが、彼が自己主張の強い性格であったこと、そして、彼が久留島家出身の「養子」だったことにあるのではないかと思ふのです。

この時代の養子は、分家からか、その家の女子にお婿さんを迎えるかして血脈を保つか、格上の家から持参金をあてにしたものの二つのパターンがありました。彼は、そのどちらでもありません。しかも、彼の兄も養子に来ており、二代続けて分家以外の格下の家から来ているのです。

当時、毛利家には二つの分家が存在(初代藩主高政の弟系と、二代藩主高成の弟系、あと初代藩主高政の兄系もあったが、ここでは二つとする。)したのも関わらず、何故彼が選ばれたのでしょうか。



それは二つの分家が、本家にとつてあまり有難くない分家だったからです。

二代高成が若くして亡くなった時、実子が二歳の幼児だったので、高成の弟を推したのが高政の弟吉安でした。

このお家騒動は、当時の老中酒井忠清(雅楽頭)の英断で、二歳の幼児が跡継ぎと決まり、破れた一派は自分の領地を幕府に返上、自分たちは御家人として生き残ります。毛利家に対する嫌がらせですね。本家との交流はあつたけれども、毛利家の家臣達は、彼等の子孫を本家に入れる事は嫌だったでしょうし、あの騒動に巻き込まれた人が存命していたのかもしれない。

そこで、女系をたどり、久留島家から二回も養子を入れる事になりました。病弱だった兄の意志もあつたのかも知れませんが、彼は健康で英明な青年だったこともあるのでしよう。

そして、藩主となつた彼は、彼の中を流れる来島水軍の血が騒いだに違いありません。

あの「海にのぞむ山城」を見た時にです。実家は内陸の

小さな居城でしかないけれど、佐伯に着任してからは、水を得た魚のように城の復旧と、漁業に力を注いだにちがいないと思うのは、歴史のロマンでしょうか。

城山の頂上から、すぐに見える小さな島（当時は島だった）を「来島」と命名したのは彼に違いないと思うのですが……………。

大切な女系

もう三十年位前、市内であった歴史教室での事です。発表された方が、毛利家のお家騒動のお話をしてくださいました。その時、「五代、六代の方は毛利家とは血のつながりのない久留島家から養子にきています。」とほつきり言われた事を覚えてます。その時、「ん？」と、思っって不思議に思いました。血縁も無い家格も下の家から、二回も養子を迎えるのだろうか。

でも、図書館で、ものの三十分もかからないうちに女系が繋がっていた事が判明。パソコンがなかった時代ですが、ちゃんと母方の家系も調べてヨロと苦笑いしたことがあります。

世の中の半分は女性。歴史も半分は女性が造ってきたものだと思います。

女系という点からは、お隣の岡藩ともつながっており、バネラーの佐伯治先生の御話も興味深く聞くことができました。楽しい一日、有り難う御座いました。

〈女系でつながる竹田・玖珠・佐伯〉

